

【海外統計事情】

第25回SCORUS — 地域・都市統計への グローバル化の影響 — 会議

(8月30日-9月1日, ヴロツワフ, ポーランド) 参加報告

伊藤陽一*

表記の会議に発表参加した。SCORUS (Standing Committee on Regional and Urban Statistics) は2年毎のISI総会の際に独自の会議が持たれて、ISI総会でもSCORUSが組織したセッションが開かれている。独自会議の第24回は2004年にアメリカ合衆国のミネソタ市で開かれ(筆者は非参加)、第23回はポルトガルのリスボンで開かれた(筆者はこのリスボン会議に非発表参加し、『統計学』第83号に、SCORUSの紹介をふくめて参加報告を書いた)。筆者の報告は「日本の都道府県のジェンダー統計書」であった。参加の動機は、日本における地方統計の研究活動強化の必要と、その場合の国際な意見交流の場としてのSCORUSへの注目であり、ともかく日本からの報告参加の記録足跡を残すこと、さらに、SCORUS会議にジェンダー視点からの報告の実績を残すことにあった。

今回の会議に参加して、2005年のISIシドニー会議(筆者は非参加)でSCORUSの新しい定款を定めて組織と活動の拡大に向けての整備があったこと、「SCORUS活動50年」の報告が新たに得た情報であった。以下では、第一に、SCORUSの新定款、第二に会議の内容についてのメモ、第三に、会議の組織・運営や日本の社会統計学との関係の可能性にふれる。

* 法政大学経済学部/日本統計研究所
〒194-0298 町田市相原町4342(大学)
iyoichi2003@yahoo.co.jp

1. 50年を経たSCORUSと新定款

前回もふれたが、SCORUSはISIの下部の8部会のうちの1つである。新定款の下では「傘の下」にある「討論の場」(platform)である。この位置関係は、ウェブサイトでISI → ISI Section → IAOS → SCORUSと進むことで理解できる。

セッション「SCORUSの50年」の報告で歴史を跡付けると、第二次世界大戦後、ISIはIAMS (International Association of Municipal Statistics) を特別につくることとした。その後、参加者を増やす意図と会費の負担問題をかかえて、1974年に新しいIARUS (Intl. Assoc. for Regional and Urban Statistics) への移行を見た。しかし問題は未解決で、1985年のIAOSの設置時にその会員が自由に参加できる形とした。そして2005年に新定款を採択したことになる。

新定款をSCORUSウェブサイトで見ると【本報告に附として、仮訳を添えさせてもらった】、SCORUSネットワークや地域SCORUSグループの設定によって、特に世界規模での地域・地域統計に関する活動を拡大するための組織的下準備を少なくとも定款上で整えたことになる。特にネットワークでは情報等の交換の重視と、地球上の地域毎に地域グループを通じて活動する方向が示された。

新事務長のWendy Thomas (ミネソタ大学) との質疑で得た点を補足すると、第一に、しばらく継続していた雑誌 *Cities and Regions* の

発行は停止された。電子ジャーナルとしての新たな発行を今後考えていこうとしている。第二に、SCORUSの予算は、学術的会議については、参加者の費用と主催機関からの支援でまかない、非学術会議的活動に関してのウェブサイト運営や諸政策・方針の作成等に関してはIAOSから財政的支援を受けている、とのことである。IAOSメンバー等の誰でもが参加できる形をとりながら小規模な会議の開催と情報交換を中心的活動としているSCORUSは、電子的通信を大いに利用して効率的活動をはかろうとしている。

2. 第25回ヴロツワフ会議の構成と内容など

ヴロツワフ（第二次大戦後ポーランド領になり、戦中・前はドイツ領。ドイツ語表現のBleslauはある者にとっては馴染みかもしれない）はポーランドの南西部、クラコフやワルシャワから列車で4時間程度のところにある。会場となったヴロツワフ経済大学には、中庭にこの大学とも縁があったオスカー・ランゲの胸像があった。

会議の構成

会議は第一日（8月30日）には、全体セッションが10時から13時まで、「キーノートスピーチ」と「SCORUSの50年」のセッションが休憩を挟んで行われ、午後から14:00-15:30に「経済成長の極としての国際都市」と「グローバル化と三次産業化の都市労働市場への影響の測定」、16:00-17:40に「既存データの最大限の利用-地理学的分析」と「都市・地域統計のデータ源」の2並行セッションがあった。第二日（8月31日）には、9:30-11:10に、「中国」、「国際移民の地域的影響」、「若者と高齢者の統計に関するベルリン会議から10年」の3並行セッション、11:40-13:00に「ジュースミルヒ」と「地域レベルでの不平等の測定(1)」の2並

行セッションが持たれ、午後にはSocial Programmeとしてヴロツワフから30キロ程南の町、マルジョビッチとブルツェックへのエクスカージョンがあり、夜にセレモニアル・ディナーが開かれた。第三日（9月1日）には、9:30-11:00に「機能的地域」、「地域レベルでの不平等の測定(2)」、「市の魅力-文化的視角」の3並行セッション、11:30-13:00に「グローバル化の理解における国際機関の役割」と「世界の諸地域と移行諸国」の並行セッションがあった。当初プログラムでは14:00-16:00に「閉会セッション」とされていたが、昼食前に「グローバル化」のセッションに接続する形で、役員等による報告とコメントそして総会があり、これが閉会セッションになった。

参加者リストによれば参加者数は21カ国から65人。ポーランドとドイツから9名、中国8（その他香港1）名、フィンランド5名、ラトビア、オランダ、UK、ルクセンブルク（Eurostat）から3名、チェコ、ハンガリー、日本（筆者と伊藤セツ）、ニュージーランド、トルコ2名、フランス、ギリシャ、ケニア（UNHabitat）、スペイン、スウェーデン、スイス、USA各1名であった。実際には代理報告があり、他方でOECDからの出席もあったので、約60名余の参加だったろう。プログラムによれば学術報告は44、そして開会セッションや閉会など全体会議での予定スピーチ数は17で、ひとまずは61の発表・報告があったことになる。学術報告は基本的に1報告について発表15分と討議10分、計25分で運ばれた。それぞれ集約的な内容がパワーポイント使用で進められ、かなりの情報と討議が飛び交った。

会議の内容

論議では、全国レベルでの論議と同じか類似のトピックス、すなわち、行政データの利用、報告者負担の軽減、データカバレッジの

改善, ロンジチュージナル研究, 適切な指標, データベースの強化, 統計の品質評価, 利用者(顧客)本位の統計の提供等, また, 都市・地域に関わっては, 地域・都市統計(詳細な地域統計)への需要の増大, 都市統計の比較可能性の強化, 地域データベース, GIS, 小地域統計での秘匿性, 等が語られた。幾つかをあげる。

第一に, 国際的視角。論文応募の呼びかけには, グローバリゼーションが地域・都市にもたらす影響について広い論題が掲げられた。プログラム組織者は問題の所在を把握していたし, メンバーはMDGs他, 今日の世界規模の諸問題とこれへの統計の対応課題は, ISIやIAOSを経て, 国連統計会議やEurostat, 途上国援助に動く諸国その他の経験を経て常識化しているといえる。しかし, プログラム全体では, 筆者をふくめてこれに真っ向から応えたとはいえなかった。今回はUNHabitat(ケニア)からのMarkandy Rai氏がMDGsや平均的数値における成長の陰での両極分解傾向を見失うべきではないことを力説していたこと, 移民問題がとりあげられていたこと, OECDからのレポート等がグローバリゼーションの光と陰を語っていた程度であろうか。

第二に, ヨーロッパ共同体の地域区分と統計。Eurostatは参加国地域に関して, 3つの階層レベル(NUTS 1, 2, 3)区分とLAU(行政単位)の区分をした上で, 地域統計を提示しつつ都市監視(Urban Audit)システムを作りあげようとしている。幾つかの国の市や区の変更の中でのコード付けの困難や統計比較可能性の確保というヨーロッパ共同体に固有の技術的問題に関わる報告もあった。SCORUSがヨーロッパを中心においている表れでもある。

第三に, 中国セッション。中国からの4人(国家統計局からの2人と北京および上海市の統計局から)の発表があった。他に第一日に国家統計局のHuang Langhui氏が全体会議

で中国の都市・地域統計に関する総論的報告をした。SCORUSが中国の都市・地域統計に大きな関心を寄せ, SCORUSの活動のアジアでの広がり の拠点を中国に求めている表れだろう。セッションの第一報告はパワーポイントを使って英語で行われたが, 第二~四報告は中国語での発表と英文論文を映写する形をとった。第三・四報告の映写は薄く内容を把握できなかった。中国の報告は全体として, 第11次5ヵ年計画がスタートするなかで中国の成長を都市がリードしており, また都市化が進んでいること, 環境保全をふくめ統計が重要になっていること, 北京市は生活時間調査に取り組み, また各地域が統計を発行していること等々であった。都市をどう定義するかによって, 国際比較や地域比較が違ってくる, という質問に対して回答ははっきりしなかった。全国レベルの生活時間調査の有無に関する筆者の質問への回答は, 未着手ということであった。

第四に, ジュースミルヒのセッション。長屋政勝会員が『統計学』第80号でとりあげているジュースミルヒ協会のエルスナー氏の報告があり, SCORUSの議長のDerek Bond(Ulster大学)が, ジュースミルヒがドイツでは過大に評価され, 非ドイツ語世界では知られていない理由としてアングロ・サクソンではなく, 王政を支持したこと, PettyやMalthusに比べると魅力的ではなかった等を指摘しながら, ジュースミルヒにおける受け容れることのできる論議・知識が, 20世紀半ばの統計学の展開の中で, 切り捨てられていることへの批判的コメントが興味深かった。実はこの日の午後のエクスカーションは「ジュースミルヒ・エクスカーション」と名づけられていた。1741年にプロシアのフリードリッヒIIとオーストラリアとの間の戦場を経由するもので, そのときジュースミルヒが従軍牧師であったという場所であった。このエクスカーションの案内をエルスナー氏がバ

スの中で熱っぽくしてくれた。

第五に、筆者の報告は最終日午前の並行3セッションの1つで行われ、参加は10名程度であった。参加者には馴染みない内容であったが、都道府県間の労働力率の差—特に山形、鳥取、富山などで高い—理由や、性別賃金格差把握の困難についてコメントと質問があった。

3. 会議の設営

会議の設営では事前情報の不足があったが、小回りの良さも感じた。Invited paper（提起された論題に沿った報告）セッションの提案が6月23日、そのpaperのアブストラクトを伴う立候補は7月10日、一般報告のアブストラクトをふくむ立候補は会議開始10日前の8月20日でありながら、プログラムが適切に組織されて会議開始4日前にe-mailで参加者に配布されたという「芸当」があった。開会セッションでプログラム組織者の巧みさに対して感謝の辞が発せられた。要旨はウェブサイト上で獲得すべきものとされ、要旨集は配布されなかった。報告もほとんどがパワーポイントによっており、印刷物の配布は少なく、論文配布は筆者をふくめてごく少数であった。一般報告の受付が遅かったことは、時間不足の筆者にとっては駆け込みの要旨提出が可能で助かったが、発表日がいつかを直前まで把握できないでいた。しかし、メンバーが多忙な中で、ほぼ大多数が発表参加者である小規模の会議の組織形態としては1つの参考といえる。常連的メンバーを中心に、エクスカッションやディナーなども和やかに行われていた。これもヨーロッパの顔なじみの連携による会議の性格によるといえる。とはいえ、ここへの開発途上国その他からの参加には敷居が高いかもしれない。

4. 日本の社会統計学への示唆

日本の社会統計学のからみて幾つかを記す。

第一は、日本での地域・都市統計研究の強化の必要性である。地域格差拡大の中で「地方分権」や、いわゆる地方財政の三位一体改革が進められる中では、各地域・都市の特性を踏まえた分析が、したがって、地域統計の諸問題は、男女共同参画統計を含めて一層重要になろう。都市社会学あるいは経済地理、地域経済論があり、新しい形の地域開発・再生論が多様に展開されている一方で、地域統計論議はやはり不足している。第二に、しかし、地域・都市統計研究の担い手にかかわっては、中世からの都市を中心とする地域形成の厚い歴史があり、地域・都市統計の担い手である地方統計家が存在するヨーロッパと、中央集権的で、中央政府によって地域統計が与えられ、地方統計家の独自性が弱い日本や、集権的とはいえないが地域統計が連邦によって提供される合衆国との違いがある。市場社会主義体制下の中国の地域・都市統計もまた、これら諸国との違いを持つだろう。地域・都市統計研究の重要性の拡大の一方で、これらの相違・特色の検討も興味深い。第三に、EUにおける必要に応じてEurostatを中心に展開してきたこれまでのSCORUSは、定款の改革をして国際地域グループのネットワークを新たに設けた。そして今後2年間のSCORUSの議長を香港の梁錦滔（Dominic Kam-to LEUNG）氏が担うことになったのも、翼をアジアに広げようとする意図を含むように思える。日中の経済的・社会的つながりの深まりを背景にして、日本での中国研究では当然のことながら地域・都市別の研究が広がりをみせているし、中国にとっても日本の地域統計は関心事項になるだろう。統計交流が多層的に行われている中国や日本、韓国等が連携をとってアジア・グループの担い手となることがありうるように思える。この場合、全国統計連合会での実務論議とともに、経済統計学会や日本統計学会における地域・都市統計研究の深まりが、先行して不可欠である。

付録

SCORUSの定款 (Statute of SCORUS)

(2005年4月シドニーのIAOS総会において合意された)【伊藤仮訳】

第1節 目標と制度的背景

(1) 都市・地域統計の開発と研究を促進するための討論の場 (platform) である SCORUS は、国際統計協会 (ISI) 内の政府統計国際協会 (IAOS) の傘下の1組織 (organization) である。

(2) SCORUSの使命は、都市・地域研究と統計に関する世界規模の対話を刺激し組織すること、および、この分野での前進に貢献し、都市・地域の現象の理解と概念と結果の比較可能性を改善するという目的をもった深い統計分析を促進すること、である。SCORUSは都市と地域政策のために創造される知識を増やすことを目標とする。

(3) 世界規模の対話のための討論の場を用意し、地域・都市の統計の指標、方法と結果についての知識を大規模に交換するために、SCORUSは

- ・ 地域・都市の研究と統計に関して、ISIとIAOS会議のセッションとともに会議 (2年毎の会議、地域会議、テーマ別の会議) を組織し
- ・ 知識とアイデアを継続的に交換し、関連する諸問題についての合意を発展させるために、インターネット上の討議の場を提供し
- ・ 経験とアイデアの世界規模での交換の場に、地域・都市統計の利用者 (研究者、政策立案者、コンサルタント) と生産者 (市、地域、国、国際レベルでの) の参加を拡大するための試みを活発化し
- ・ 地域的SCORUSグループ内で共通の関心あるトピックスについての交換と協力を促進する。

第2節 SCORUSの運営陣 (Management)

(1) SCORUSはSCORUS運営陣によって運

営される。SCORUS運営陣は次の者からなる

- ・ SCORUS議長
- ・ SCORUS副議長
- ・ SCORUS事務長
- ・ SCORUS会計担当者
- ・ SCORUS地域グループ (SRG: SCORUS Regional Groups) の組織者 (SRGの構成に関しては第3節を参照)

(2) SCORUSの議長、副議長、事務長、会計担当者は、SCORUSの総会 (第3節(3)参照) の指名および勧告によって、2年毎のISI会議において2年任期でIAOSによって定められる。

(3) SCORUS運営陣は、ISIとIAOSの会議およびSCORUSの特別会議の際に、定期会議を開く。運営陣はIAOSに対して、SCORUSの活動、予算事項、政策を報告する。IAOS会長は、これらの会議に招請されることができる。

第3節 SCORUSのネットワーク

(1) SCORUS運営陣は、SCORUSネットワーク (SN) を組織し、SNはSCORUS地域グループを構成する。SCORUSネットワークの参加者は、SCORUSの活動に積極的に参加する研究者、計画立案者、統計家である。

(2) SCORUSの中核的目的は、地域・都市分析、研究と統計についての概念、方法、産出物の調和を強化することである。これを達成するために、SCORUSネットワークは

- ・ 標準化という考えに基づいて活動している研究者や機関 (国連、ユーロスタット、諸統計局) および地域・都市統計指標に重大な関心を持っているOECDやヨーロッパ諸 (Eurocities) と深い対話を持つ
- ・ 標準や方法論の開発と文書化、そしてまたそれらをSCORUSのウェブサイトですべて入手可能にすることを促進する
- ・ 方法、分類および統計の調和についての提案を発展させ、そういった機関からの関連

- する問題に関する助言について積極的に貢献し
- ・それらのトピックスに対する専門家の世界の意識を高め、変化する利用者のニーズに対応するように国家とその下部 (sub-national) の統計の生産者に影響を与えることを狙い
 - ・利用者のニーズを学び、結果を伝える通信戦略を開発する
- (3) SCORUS ネットワークは、ISI の2年毎の会議の際の IAOS 執行委員会会議に先立って、2年毎の SCORUS 会議において総会を開催する。総会は
- ・ SCORUS 運営陣が提案する報告と政策を論議し
 - ・ SCORUS 活動を調整するために、SCORUS 地域グループの報告と活動を論議し
 - ・ SCORUS 運営陣の候補者を提案する。
- (4) SCORUS ネットワークは以下のような SCORUS 地域グループ-SRG を構成する。SCORUS ネットワークへの参加を望む人は、以下のグループのいずれに参加することを選択しなければならない。
- ・ (アフリカ SCORUS 地域グループ)
 - ・ 南北アメリカ SCORUS 地域グループ
 - ・ アジア SCORUS 地域グループ

- ・ (オーストラリア・ニュージーランドおよび太平洋の SCORUS 地域グループ)
- ・ ヨーロッパ、地中海および中東 SCORUS グループ

参加者数と組織的力次第で、グループは自ら共同 SRG を組織してよい。

- (5) 各 SCORUS 地域グループでは組織者 (Organizer) が議長になる。この組織者は、総会の指名に基づいて SCORUS 運営陣が任命する。

第4節 アドバイザー団 (Panel of Advisers)

- (1) SCORUS 運営陣はアドバイザー団を任命することができる。アドバイザーは、この分野で長期にわたる経験をもち貢献してきた SCORUS ネットワーク参加者である。アドバイザーは2年任期で任命され、次期に再任される資格をもつ。

- (2) アドバイザー団は、その個人的力量において助言をする。SCORUS 運営陣はすべてのアドバイザーが考えを知らせられており、意見を求めるようにする。

- (3) アドバイザー団はまた、SCORUS 活動、特に SCORUS ネットワークの形成と拡大において援助する。